

明治一五〇年

「最後の將軍」水戸街道

片倉宿に宿泊す。

時をさかのばること一五〇年、元号が慶応から明治に変わる少し前、江戸幕府の政局は大きな節目を迎えていました。

慶応三年（一八六七）十月に実現した大政奉還を経て、同年十二月、王政復古の政変により、「最後の將軍」徳川慶喜は政権を返上しました。翌年一月には、薩長を主體とした新政府軍と旧幕府軍が京都南郊の鳥羽・伏見で開戦。旧幕府軍は敗走し、慶喜は、大坂城を脱出、海路にて江戸に向かいました。慶喜には追討の勅命が下り、「朝敵」となってしまいます。江戸城西の丸に入つた慶喜は、江戸城を出て寛永寺に移り、自ら謹慎しました。

三月、旧幕臣勝海舟と新政府軍参謀西郷隆盛が会見し、江戸城総攻撃の中止、水戸での慶喜の謹慎が決まり、江戸城は四月十一日に新政府軍に

明け渡されました。彰義隊や旧幕臣の暴発を恐れた慶喜は、四月十一日午前三時に寛永寺を出発し、水戸街道を下り、幼年時代に学んだ弘道館を目指しました。

水戸街道は、東海道などの五街道に準じる脇街道として整備されました。その距離は、江戸日本橋を基点として水戸まで約百二十キロメートルあります。街道沿いには、十九の宿場があり、小美玉市内には、竹原と片（堅）倉に所在していました。

慶喜一行は、浅野氏祐、新村猛雄らの側近に加え、高橋精一（泥舟）らの遊撃隊など二〇〇人余が護衛にあたりました。御用金は、町火消の頭であつた新門辰五郎に金二万兩を江戸より運搬させていました。その後、十一日松戸泊、十二日藤代泊、十三日土浦泊、

そして、十四日には、片倉に宿泊しています。

片倉宿は、小美玉市役所裏の国道六号の旧道沿いにあり、今も宿場の雰囲気が残っています。文久元年（一八六一）の「旅人改帳」には、一〇軒の旅籠が名を連ねており、「御殿」と称される本陣、脇本陣、問屋もあつたとされています。

歴代水戸藩主は、江戸から水戸までの道中で、最後に府中宿（石岡市）に宿泊するところが多かつたのですが、慶喜一行は、府中の一つ先の宿場町、片倉に宿泊しています。この際の記録は現在のところ見つかっていませんが、おそらく、「御殿」に宿泊したと思われます。片倉宿を出た慶喜一行は、十五日に水戸に到着し、弘道館至善堂に入り、謹慎します。

徳川家が駿府に移されると、三か月に及んだ水戸での謹慎の後、七月十九日、慶喜は、水戸を離れ、次の謹慎地である駿府宝台院（静岡市）に鉢田 銚子を経由し、舟で向かいました。明治と改元されることは、慶喜が弘道館を離れて四〇日後のことです。



現在の片倉宿



弘道館至善堂

写真提供：茨城県弘道館事務所



弘道館至善堂御座の間

写真提供：茨城県弘道館事務所

